



欧州在外研究滞在記

東京理科大学 経営学部 ビジネスエコノミクス学科 准教授

なか だ さと し
中田 里志

滞 在 地：イギリス ロンドン

在 外 先：ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・
ポリティカル・サイエンス

(London School of Economics and Political Science (LSE))

滞在期間：2023年9月9日～2024年8月31日

はじめに

私は2023年9月より1年間、東京理科大学の国際支援課が実施している在外研究制度を利用させていただき、主にイギリスはロンドンにあるロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）に滞在していました。私は経済学の中でも理論的なことを研究しており、中でもゲーム理論（特に協力ゲーム理論）・社会選択理論という分野を専門としています。この分野の最近の研究の中心地はヨーロッパであり、特に社会選択理論

は経済学者と哲学者の共同による貢献も大きく、LSEの哲学部に付属するCPNSSという研究組織はその中心の一つと言える環境です。今回私は、CPNSSに所属しているAlex Voorhoeve教授に受け入れて頂く形での滞在でした。Voorhoeve氏とは、以前から共同研究グループを構成し交流があったのですが、コロナ禍で中々滞在も難しい時期が続き、今回の長期滞在は「ようやく行くことができた」という側面もありました。

この滞在記では、この1年間を振り返って私生活と研究生活について書いてみたいと思います。



CPNSSのオフィスLakatos building



世界文化遺産ストーンヘンジ



バッキンガム宮殿



クリスマスシーズンのピカデリーサーカス

ロンドンでの生活

ローカルライフ

今回の在外研究で最も大変だったのは、実はロンドンに出向く前の準備でした。特に家探しは難航し、現地のエージェントと夜中にやり取りをしたり返事を催促したりと大忙しでした。結果的に、渡英予定の直前になってようやく家が決まった次第で、現地時間で9月1日から契約開始予定の契約書の最終版が日本時間の9月1日に届くという先行き不安なスタートでした。

そんなこんなで現地に着いてからも一抹の不安はあったのですが、そこは先にコストを払ったと言うべきか、目立ったトラブルもなく過ごすことができました。私が住んでいたのはロンドンの中心地から電車でおおよそ40分程度西に行ったイーリング地区という場所で、落ち着いた住宅街という感じでした。1996年にビートルズがプロモーションフィルムの撮影を行ったチズウィック・ハウスやロンドン自然史博物館などが近隣

にあり、滞在中も数回訪れました。

住み始めて最も良い経験だったのは、街に住む人達ととても親しくなったことで、帰国した今でも定期的にやり取りをしています。これにはイギリスのパブ文化の恩恵をととても大きく受けました。イギリスは人種のるつぼだとよく言われますが、親しくしていた人達だけでも、イギリス生まれイギリス育ちという以外にアメリカ・フランス・ポーランド・イタリア・南アフリカ・スペイン…と出身国も多様でした。私にとって1年間の海外生活は初めてのことで、こういったとても現在の日本では味わうことができないローカルライフも大変貴重でした。

ロンドンに住んでみると、大英博物館をはじめそこかしこに観光スポットもあり、街並みも魅力的でした。また、少しバスに乗れば世界文化遺産であるストーンヘンジにも簡単に行くことができます。こういった文化的な資源が豊富である点はさすが大英帝国と言ったところですね。



滞在中何度も通った近所のPUB



オフィスのすぐ外にはパブがあり、夕方から連日学生達で大盛況

研究生活

LSE での滞在中は CPNSS にあるビジター研究室を使わせてもらうことができ、基本的にはそちらで仕事をしていました。先にも書きましたが、私が行うのは理論研究のため、実験をするための大規模な施設が必要になったり、人材が必要になったりすることなく、研究はいわゆる「紙とペン」で行います。その意味では、ロンドンで研究するのも日本で研究するのも変わりはないのですが、研究のみに集中できるというのはとてもありがたいことで、普段は講義に学務にと何かと細切れの時間になってしまうところ、1日中ずっと自分が取り組んでいる問題について考えることができる絶好の機会でした。気分転換にファカルティーメン

バーとコーヒーを飲んだり、また一緒に勉強会を行ったりと気軽にやり取りをすることができるというのも現地滞在中ならではの楽しみです。

ヨーロッパでの研究

地理的なメリット

LSE の哲学系の研究者とは取り組んでいた社会選択理論に関する研究について話すことが主でしたが、私のもう一つの研究テーマである協力ゲーム理論についての研究の中心地は大陸ヨーロッパ、特にフランス・オランダ・スペイン・ドイツなどであり、地理的にも近かつ共同研究者がいるフランスには何度も訪れました。イギリスでの生活は先に書いたようにとても良いものだった一方で、ロンドンは世界屈指の高物価に円安の影響が加わり、さらに言わずと知れた食文化の乏しさも相まって QOL はフランスにいる方が高かったように思います（笑）。

フランスでは主にパリにあるエコール・ポリテクニク、サクレ大学、そして中南東部にあるサン＝テティエンヌ大学に訪問し、共同研究者と朝から晩まで議論するというとても恵まれた時間を過ごしました。この在外研究中のフランス訪問までは、基本的にメールなどの文面上のやり取りで研究を進めて来たわけですが、時差もなくリアルタイムで疲れるまで議論することができたことで、大変に研究が捗りました。これはよく言われることだと思いますが、研究の合間の雑談から別な研究テーマが見つかることもよくあります。私自身そういうことはこれまで何度もありましたが、今回もメインで議論していた問題から派生した問題や全く違う問題など、帰国した現在も一緒に取り組んでいる新たな課題を見つけることにも繋がりました。

イギリスとフランスが地理的に近いのと同様に、スペイン・オランダ・ドイツとフランスから地続きで気軽に行ける国々があるというのは、ヨーロッパの極めて大きな強みであることを改めて感じました。実際、私が3月にフランスに行った際、マーストリヒトとサン＝テティエンヌのグループの共同研究会があり、普段東京にいる私がふらっと関西や九州の研究会へ出席するのと同じ感覚で周辺国の研究者が来ていました。このように簡単に研究者交流が行われると自然に共同研究も生まれるもので、生産性も高まります。私も新しい研究仲間が実際に増えましたし、参加していたオックスフォード大学の研究者には「ロンドンにいるな



ブザンソンで行われた国際学会での発表風景



学会ディナーの様子

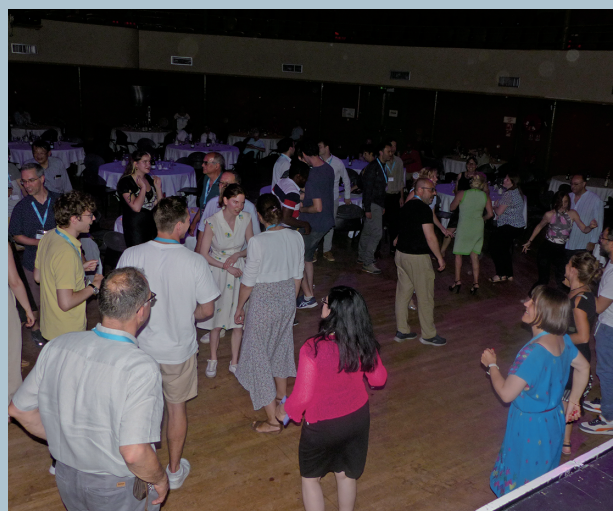
ら近いから、イギリスに戻ったら今度セミナー発表においでよ」とお招きいただきました。さすがに、普段日本にいとそんなに気軽に誘ってもらうことは難しいわけですが、こういった経験をする、帰国後も可能な限り定期的に訪問しようという気持ちが強くなりました。

国際学会めぐり

この在外研究も終わりに近づいた6-7月は、例年私の分野に関わる国際学会が様々な国で開かれるのですが、幸運にも2024年はフランスで開かれるものが多い年でした。そこで、5月31日にお招きいただいたオックスフォードでのセミナーを皮切りに、クレタ島・パリ・リヨン・サン＝テティエンヌ・ブザンソンと1ヵ月半にわたりセミナー・学会発表の旅を行いました。手元のカレンダーを見てみると、6月の最終週（この週はサクレ大学に再び訪問し共同研究に集中していました）を除いて毎週どこかで研究発表をしていました。日本はまだ学期中なので、上手く予定を組めれば2回くらいは国際学会に参加できそうだというのが例年のもどかしいところですから、最後まで在外研究の恩恵を享受できたと感じています。本当にありがたいことです。

おわりに

はじめはどうなることかと思っていましたが、終わってみると本当にあっという間の時間で、とても充実した在外研究になりました。惜しむらくは、当初予定



ヨーロッパならではの、食後(?)のダンスパーティー

した通りには家族全員で1年間の滞在ができなかったことです。私が一人で滞在している間、日本で娘の面倒を見てくれていた妻には心から感謝いたします。帰国後、御多分に漏れず久しぶりに会った我が家のネコ達はよそよそしかったです、3日で恩を忘れるようなことはなかったようで、これを書いている最中もキーボードの上で転がっています。次の機会に恵まれた際は、是非とも家族みんなで行きたいものです。

今回の滞在は、LSEでの受け入れを快く引き受けてくださったAlex Voorhoeve教授、支援をくださった国際支援課、そして所属先である経営学部の皆様のおかげで実現することができました、末筆ながらこの場を借りて感謝を申し上げたいと思います。

